学校教育における同和教育の課題

―グローバルとローカル・或いは「水平社宣言」と藤蔵さん―

附属中・高等学校 ❖ 朝倉孝之

西光萬吉翁遺影

同和教育の意義は、人間を解放することであり、人間を自由にすることである。それは、被差別の位置にある人々を被差別の位置から解放することを意味するだけでなく、差別している・させられている側の人間をも、人間らしく自由に解放することを意味する。

同和教育の場は、学校教育と社会教育の二つがある。部落の完全解放を目指し、差別に反対し、人権を大切にする同和教育の観点から、前者におけるその課題を「水平社宣言」と藤蔵さんに託して述べる。

一・「水平社宣言」と「世界人権宣言」

同和教育の中心的課題は、言うまでもなく「部落問題解決のための学習」であり、それは被差別部落の完全解放を目指し、差別に反対し、人権を大切にする教育である。また人権尊重・反差別の潮流は世界的な流れであり、これからの世界の歴史や情勢を動かして行く非常に大きな要素である。そのような視点に立って同和教育を考え、構築する必要がある。

そうすると、「水平社宣言」はこの国で唯一の人権宣言であることがわかる。そして、国連の第三回総会において採択された「人権に関する世界宣言」（「世界人権宣言」）に比肩しうる存在であることが、改めて確認される。

「全國水平社創立宣言」（「水平社宣言」）は、一九二二年（大正十一年）三月三日、京都市・岡崎公会堂での全国水平社創立大会で採択された。宣言は同年二月、西光萬吉が起草し、二月二十六日夜、京都駅前の旅館に西光・坂本清一郎・米田富・駒井喜作らが集まり決定し、大会では駒井が朗読、三千名余の参加者に大きな感激を与えた。

全国に散在する吾が特殊部落民よ團結せよ

長い間虐められて來た兄弟よ、過去半世紀に種々なる方法と、多くの人々とによつてなされた吾等の爲めの運動が、何等の有難い效果を齎らさなかつた事實は、夫等のすべてが吾々によつて、又他の人々によつて毎に人間を冒瀆させてゐた罰であつたのだ。そしてこれ等の人間を勦るかの如き運動は、かえつて多くの兄弟を堕落させた事を想へば、此際吾等の中より人間を尊敬する事によつて自ら解放せんとする者の集團運動を起せるは、寧ろ必然である。

兄弟よ、吾々の祖先は自由、平等の渇仰者であり、實行者であつた。陋劣なる階級政策の犠牲者であり男らしき産業的殉教者であつたのだ。ケモノの皮剝ぐ報酬として、生々しき人間の皮を剝ぎ取られ、ケモノの心臓を裂く代價として、暖い人間の心臓を引裂かれ、そこへ下らない嘲笑の唾まで吐きかけられた呪はれの夜の惡夢のうちにも、なほ誇り得る人間の血は、涸れずにあつた。そうだ、そして吾々は、この血を享けて人間が神にかわらうとする時代にあうたのだ。犠牲者がその烙印を投げ返す時が來たのだ。殉教者が、その荊冠を祝福される時が來たのだ。

吾々がエタである事を誇り得る時が來たのだ。

吾々は、かならず卑屈なる言葉と怯懦なる行爲によつて、祖先を辱しめ、人間を冒瀆してはならぬ。そうして人の世の冷たさが、何んなに冷たいか、人間を勦る事が何んであるかをよく知つてゐる吾々は、心から人生の熱と光を願求禮讃するものである。

水平社は、かくして生まれた。

人の世に熱あれ、人間に光あれ。

大正十一年三月三日

全國水平社創立大會

宣言を起草した西光萬吉（一八九五・四・一七～一九七〇・三・二〇）本名は清原一隆。奈良県南葛城郡掖上村大字柏原北方西光寺住職、父清原道隆、母コノエの長男として生まれる。北方は、被差別部落で西光寺は浄土真宗本願寺派の末寺である。

一九一〇年、県立畝傍中学校（現畝傍高）へ入学するが、差別のため二年で中退。一九一一年、四月、京都市平安中学校（現平安高）に編入学し、僧侶への修業にはげむが、畝傍中学校から転勤の体操教師によって部落出身をあばかれ、中途退学する。その後、ついに仏教の世界に絶望。僧侶になることを断念し、京都市の関西美術院を経て、一九一三年、東京の太平洋洋画会研究所に入塾する。中村不折らに指導を受け、国民美術展覧会に入賞、翌年

三月には二科会の画展にも入選する。

こうして若き天才画家として、西光萬吉は画壇から注目をあびることになる。その後、好意的なパトロンであった松岡某から奈良旅行の案内を頼まれたり、絵の恩師の岡（名不詳）先生から娘との養子縁組みを求められたりするなかで、被差別部落の出身であることが明らかになることをおそれるとともに、部落民としての悲哀を感じ、美術の世界から遠ざかった。

一九一七年、貧しい生活と病気のなか、友人の坂本清一郎に助けられながら故郷の奈良に戻り、「柏原青年共和団」のちに「つばめ会」などを結成し、村内の民主化につとめたり、社会問題などの研究を行う。この頃から、東京の堺利彦・山川均・大杉栄・荒畑寒村、神戸の賀川豊彦らと交友が深まる。

宣言にはマルクス主義の影響もあるが、基本的にはその思想は仏教であろう。しかし、「荊冠旗」（これも西光萬吉のデザイン）に見られるように、キリスト教の影響も見受けられ、さらに時間的・空間的に大きなとらえかたは老荘思想の影響が考えられる。

「水平社宣言」の思想は、西光さんの自伝に「親鸞の『嘆異抄』からマルクスの『共産党宣言』まで乱読した」とあるように、当時の社会的背景（一九一七年・ロシア革命／一九一八年・米騒動等）や情勢が知識人に与えた衝撃を無視しては解明できない。が、もっとも大切なことは、その真髄は「人間は敬うべきだ」という「人間の尊敬と礼讃」であり、人間性回復のその主張が、学者や政治家ではなく、被差別部落出身の青年によってなされたということである。

「そしてこれ等の人間を勦るかの如き運動は、かえつて多くの兄弟を堕落させた事を想へば、此際吾等の中より人間を尊敬する事によつて自ら解放せんとする者の集團運動を起せるは、寧ろ必然である。」

水平社創立に至るまでには、「これ等の人間を勦るかの如き」部落改善運動や融和運動があった。それらの運動のいう部落に対する「憐れみ」の本質をはっきりと見抜き、「改善」と「解放」が根本的に異なっていることをこの一節は表している。これは、「水平社宣言」の歴史的位置を明確にしたものである。同時に、人間は憐れむべき存在ではなく、尊敬すべき存在であること、そして、自らの手で自らを解放せんとする連帯も必然であることを、やはり大きな歴史的な視点から表現したものである。

「吾々は、かならず卑屈なる言葉と怯懦なる行爲によつて、祖先を辱しめ、人間を冒瀆してはならぬ。そうして人の世の冷たさが、何んなに冷たいか、人間を勦る事が何んであるかをよく知つてゐる吾々は、心から人生の熱と光を願求禮讃するものである。」

この一節は、それまで述べてきたことのまとめになる。「水平社宣言」が非常に深い思索の裏づけによって起草されたことは、「勦る」という言葉を詳しく論じていけばよりはっきりする。この語は宣言中二か所用いられており、ともにかなめとなるところにある。水平社宣言の歴史的に抜きん出ているところは、実はこの語の深く意味するところにある。それは、人間において、他者に対する同情や憐れみは本当の理解ではない。もちろん、解放ではない。互いに尊敬しあい、その尊厳を尊重することが平等なのだ、とこの語は示している。これは、すぐれて普遍的な思想であり、現代世界のもつ種々の問題（例えば先住民族の問題等）にとっても重要な視点である。

「人権に関する世界宣言」（「世界人権宣言」）は、一九四八年十二月十日、第三回国際連合総会において採択された。その前文、

人類社会のすべての構成員の固有の尊厳と平等で譲ることのできない権利との承認は世界における自由、正義及び平和の基礎をなしているので、

人権の無視と軽蔑とは、人類の良心をふみにじった野蛮な行為を招来したのであり、また、人間が言論及び信仰の自由と恐怖及び欠乏からの自由（解放）とを享有する世界の到来は、あらゆる人たちの最高の熱望として宣言されてきたので、

（中略）

すべての国とが達成すべき共通の基準として、この宣言を布告する。

満洲事変から戦中の日本における人権抑圧やナチス・ドイツのユダヤ人迫害などに対して、さらには、大量破壊と大量殺戮とをもたらした戦争そのものに対して、人類の過誤であり犯罪であるとの認識から、国連は、「自由・正義・平和」の基礎となる人権問題を大きくとりあげる。それが結実したのが、

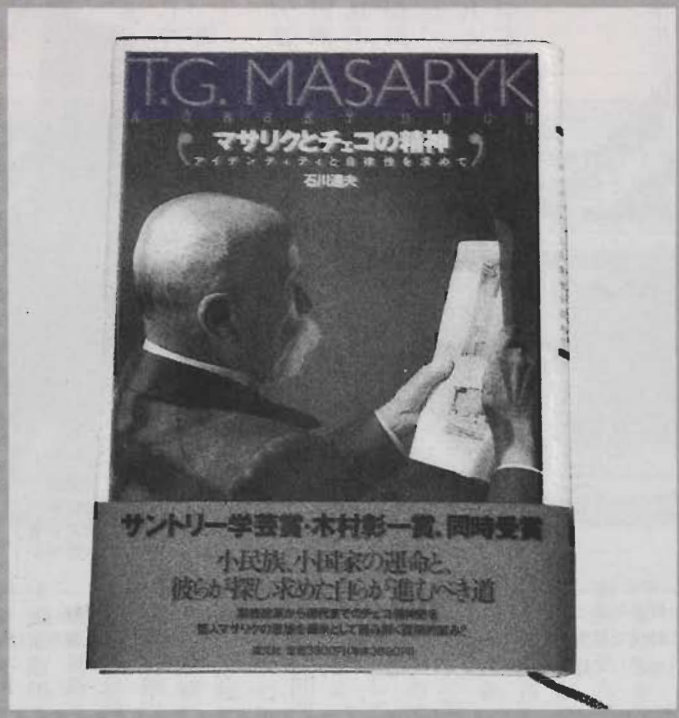
西光萬吉「蘭陵王」（軸）絶筆
絵の中に慈悲，平和共栄・千秋萬歳の文字が刻まれている。

総合科学部石川達夫著

『マサリクとチェコの精神—アイデンティティと自律性を求めて』が

「サントリー学芸賞」及び「木村彰一賞」をダブル受賞

「サントリー学芸賞」と「木村彰一賞」



本学総合科学部石川達夫助教授は、本年度（一九九五年）の「サントリー学芸賞」を受けられ、併せて「木村彰一賞」も受けられました。

サントリー学芸賞は、わが国で社会と文化に関する独創的で優れた研究・評論活動をされた方に毎年贈られるもので、石川先生の著書『マサリクとチェコの精神—アイデンティティと自律性を求めて』が歴史的な研鑽と現代的な意義とを兼備した卓越した業績として、その〈思想・歴史部門〉において、高く評価されました。

木村彰一賞は、世界的なスラヴ学者であった故木村彰一東大教授を記念して、スラヴ研究において優れた業績を上げた者に毎年贈られるもので、先生の今回の受賞作を中心としたチェコ精神文化史の総合的研究が高く評価されました。

マサリクとチェコの精神

今回の受賞の対象となった『マサリクとチェコの精神』は、哲人政治家マサリクの思想について、土壌となったチェコ史を踏まえつつ論究したものであるが、マサリクを軸に〝チェコ精神史〟を読み解く試みともなっている。

群盲政治家によって操られている現在の我々を見るとき、政治家のあるべき姿と民族のあるべき姿を考える絶好の著書となっている。

トマーシュ・ガリグ・マサリク（一八五〇～一九三七）は、英国の哲学者カール・ポパーをして「おそらくかつて存在した最良かつ最高の民主主義国家」と言わしめた、チェコスロヴァキア第一次共和国の独立運動の指導者であり、初代大統領でもある。

当時チェコは、オーストリア・ハンガリー帝国（ハプスブルグ家）の支配下にあり、民族滅亡（ゲルマン同化）の危機を経て、民族復興運動を展開していた。本来大学教授（哲学・社会学）であったマサリクは、チェコの精神伝統の中から引き出した「人間性」と「民主主義」の理念を掲げて、チェコ人の精神的指導者となった。

特に興味深いのは、マサリクがチェコの民族主義の排外主義的な側面を痛烈に「自己批判」して、「民族性」と「世界性」・「人間性」を調和的に統合したことであり、この点に今日の民族問題を考える上での大きな示唆がある。

本書の魅力

特に本書の魅力は、チェコの宗教改革者ヤン・フスや教育学者コメンスキー（コメニウス）などからマサリクを経て現チェコ大統領ハヴェルに到るまでの劇的なチェコ精神史の流れを、塚本哲也氏が「スメタナの『我が祖国』やドヴォルザークの『新世界』のように感動的だ」と評しているように（『日本経済新聞』）、非常にいきいきと描き出している点である。

（広報委員　安藤正昭　記）

『マサリクとチェコの精神—アイデンティティと自律性を求めて』
三八〇〇円（成文社）

プロフィール

（いしかわ・たつお）
◇一九五六年生まれ
◇一九八八年、東京大学大学院人文科学研究科博士課程修了
◇一九九一年から現職
◇専攻＝ロシアとチェコの文学・思想